

# 花園大学国禅研が永平寺東京別院を視察

## 僧堂交流で曹洞宗の御正忌に触れ



### 曹洞宗・妙心寺派

洞宗総研の志部長（当時）と研究員の3人が妙心僧堂の見学と開山忌斎齋を視察した。

その後、17年11月には面派と両研究所の交流が正式にスタート。18年6月には京都八幡にある達磨堂圓福寺を両研究員が訪問し、摂心に参加。さらに今年2月には妙心寺派教化センターと曹洞宗総研が共催した「禅宗法式シンポジウム」を花園大学で開催し、臨済宗の開山正当忌と曹洞宗の開山報恩法要とを比較。そして今回は曹洞宗側が招く形で、道元禪師の命日を勤める永平寺東京別院の御正忌に参列した。

曹洞宗総研専任研究員の石原氏は「妙心寺派と曹洞宗とは、同じ開山忌でもニユアンスは違う。妙心寺派の開山忌は全ての寺院が行うわけではないが、曹洞宗ではこの寺院でも開山忌を行っている。では、妙心寺派の開山忌に相当する

ような曹洞宗の行持は何かと考えた場合、御正忌だろうと考え、永平寺東京別院の御正忌を紹介した」と、今回の視察の経緯を説明する。

花園大学国禅研客員研究員の本多氏は「初めて曹洞宗の法要にじかに触れた。臨済宗と同じく曹洞宗も所作を大事にされており、威儀即仏法の真髓を見せてもらった。行持の進行は同じ禅宗という点もあり、理解できた。そして見ていてわかるので、儀式の一つ一つ、お経の読み方など、臨済禅との違いを際立って感じることもできた。法要も日常の所作も、曹洞宗のことを知ること、我々の日常への理解の深まりを実感できた」と交流の意義を語る。

また食事の時に使う度量器（臨済宗では持鉢）も似ているようで違っており、本多氏は「随意飯という略式での食事だったが、初めて度量器を持たせていただけて使い方を教えてもらい、細かな所作や持ち心地の違いを体験できるなど、良い経験

曹洞宗総合研究センター（志部憲一所长）と花園大学国際禅学研究所（野口善敬所长）は近年、活発な交流を行っているが、10月29日に港区の永平寺東京別院で行われた

信樹、桐野祥陽、小川太龍の5氏が参列し、曹洞宗総研からは、関根隆紀、小杉瑞穂、南原一貴、石原成明の4氏が参加した。（写真）

御正忌に花園禅研の研究員5人も参列し、法要を視察した。

現在、面派では「學術交流」「僧堂交流」「布教交流」の三本柱を掲げて交流しており、2016年12月に妙心寺派教化センターも参画する形で曹

花園禅研からは、本多道隆、丸毛俊宏、松原

寺派の開山忌に相当する

験できた」と喜んでいました。